

過渡期における軍事と育児

清水修 一

(一)

共産主義社会の建設における過渡期を否定する人たちは、彼らは、決して「国家」を廃絶することはできない。何故なら彼らは「国家」を視ることができないのだから。「国家」を視ることのできない彼らには「国家」を廃絶することは絶対に不可能である。

過渡期の国家は無政府国家、そして「不可視の国家」である。この「不可視の国家」を視ることのできない人たちは、単に「国家」を廃絶することができないばかりか、国家の奴隷であるしかない。

過渡期の国家を認めない、「今すぐ『国家』の廃止を」
「今すぐ無政府共産社会を」と叫ぶ人たちは、見かけの戦斗性とは逆に日和見主義におち込む。彼らは、そう叫ぶことによって（その主張自体は全く正しいのだが）「国家」を強化し、「半国家」を一人前のブルジョア国家へと育てあげようとする人たち（例えばマルクス主義者たちの手助けをするのだ。我々は過渡期において、国家を復活させようとする全ての勢力、とりわけマルクス主義者を中心とする「右」の日和見主義、そして

この教条的アナキストを中心とする「左」の日和見主義と斗わねばならない。

「反権力」がそれ自体、「権力」にとつては「権力」であるように「反国家」もまた「国家」すなわちブルジョア国家にとつては「国家」なのである。過渡期の国家は反国家としての国家である。

革命とは権力の問題である。我々は支配者の「権力」に「反権力」を「人民の権力」を対置する。だからこれは「権力の奪取」ではない。そうではなく、奴らの権力に「人民の権力」が取ってかわるのだ。マルクスふうというなら、労働者はできあいの権力を単にその手に握り、それ自らのために使うことはできない。労働者人民は自身の権力を創出しなくてはならないのだ。権力を廃絶するための権力「人民の権力」を。

国家はその権力によって規定される。だから新たな国家には新たな権力が必要である。そして過渡期の国家には過渡期の権力が必要である。もちろん全ゆる「国家」全ゆる「権力」は廃絶されねばならない。だが、だからといって我々は自身の暴力「権力」を決して投げ捨ててしまつてはならないのだ。

過渡期の「国家」を「半国家」ということができるなら、それに対応する「権力」は「半権力」ということが

できるだろう。過渡期の権力はブルジョアジーの権力によって規定される。彼らの存在が我々の権力を規定するのだ。ブルジョアジーは労働者を支配し抑圧することはできても労働者を一掃し廃絶することは決してできないのだ。そうすれば彼らは彼ら自身をも一掃し廃絶してしまうことになるのだから。だが、労働者はブルジョアジーを単に支配し抑圧するだけでなく、ブルジョアジーを一掃し廃絶する。そうすることによって、労働者は労働者としての自己をも廃絶する。そして同時に労働者は自己の「権力」をも「国家」をも廃絶するのだ。

「反政治」と我々が云う時それは全ての「政治」に反対するわけではない。我々が支配者の「政治」に對置する「反政治」とはやはり「政治」なのだ。だがそれは「人民の政治」である。そして「人民の政治」の最高形態とは人民の戦争、革命戦争である。

(二)

過渡期の国家は「支配階級として組織されたプロレタリアート」（マルクス）である。だがレーニンほど大きくさにまぎれてとんでもないことをいう。「プロレタリア独裁・すなわち抑圧者を抑圧するために被抑圧者の前衛を支配階級に組織すること」（全集二五巻、傍点は私）さらに彼は、プロレタリア独裁と個人による独裁は全く矛

盾しない、などと云い出すのだ。人民は絶対に自らの権力をこの程度の火事場泥棒にゆずり渡してしまつてはならない。プロレタリア独裁とは武装した人民なのだ。人民は決して「前衛」などに武器を預けてしまつてはならない。又、中央集権化にも応じてはならない。中央集権とは人民からの権力の収奪に他ならない。中央集権はブルジョア国家への逆もどりコースである。過渡期における前衛の任務とは、一切の収奪から人民の権力を防衛することである。唯一、全人民の武装がこの過渡期の国家が過渡であることの、真の共産主義社会建設への革命の前進の保証なのだ。過渡期の国家は、そのあれこれの国家機関によって「国家」ではなく、武装した人民というその機能の故に「国家」なのだ。

過渡期は二つの時期に区別することができる。個々のブルジョア国家を廃止し、それに最下層被抑圧民族人民、そして原始共産制に生きる人々の国家がとつてかわる。例えば、それはアイヌモシリであり、台湾連邦でありインディアン共和国である。そして、これらの「国家」はさらに世界単一共和国、世界ソヴィエト共和国へと止揚される。この二つの時期に対応するものは、国際―世界革命戦争である。

個々の自分たちの国家を失った、あるいは失ないつつ

指揮官及び各種委員は決して兵士以上の待遇を得てはならない。つまり、必要以上に受けとってはならない。

「必要によって各人から、必要によって各人へ」である。けれども戦斗中は一切指揮に従わねばならない。指揮官を——自らの任命した——信頼できない軍隊は決して勝利できない。もちろん非戦斗時には、集会その他の行動は全く自身であるが、一定の規律は課せられるだろう。だがそれは兵士としての、というより人民としての規律である。中国紅軍の「三大規律八項注意」などは良い手本となるだろう。同時に我々はドウルティ部隊の「無規律の規律」「組織された無秩序」というスローガンと思いだすだろう。

反革命との最後の戦斗は正規戦——正面戦となるだろう。その時の主力部隊は民兵正規軍である。もちろん民兵バルチザン、民兵地方軍も正規戦を戦うことができなくてはならない。

革命戦争の初期には、我々は敵と正規戦を闘い勝利することはできないし、充分な正規軍を建設することも困難である。それ故この時期の主力は民兵バルチザン——ゲリラである。だが民兵正規軍、民兵地方軍もバルチザン戦——遊撃戦を闘うことができなくてはならない。

各地区、各地方、各コミューンを防衛するのは主とし

て民兵地方軍の任務である。だが正規軍バルチザンも又この闘いを支援するだろう。

民兵正規軍及びバルチザンは全民兵からの志願兵によって編成される。又、戦局に応じて、各部隊から選出され又軍管区の軍事を指揮する評議会によって再編成される。さらに各種の軍事評議会は各コミューン、あるいはその連合体に統合される。軍事はコミューンから独立した存在ではない。軍事が育児を支配してはならない。又その逆があってもならない。

全世界にコミューンを！

戦斗準備！同志たち

黒衛四年一月一〇日

カー『バクーニン』論 (3)

III

マックス・ネットラウ

ロシアにおけるバクーニンの生活（一八一四—四〇年、三一九〇ページ）は今では、豊富な入手可能な資料、家族の書簡、スタンケヴィチ、ペリンスキ、その他の手紙、コロニロフが「バクーニン一家」（一九〇九年五月に創刊された『ルスカヤ・ムイスリ』誌）でことのほかの注意をはらって最初に発表したほう大な資料——大判の全一四プラス七一八ページの『ミハイル・バクーニンの青年時代』、という単行書の助けをかりて記述することができ。国立版（モスクワ）は、一八六一年までのバクーニンの著述や手紙のうち編集者のステクロフが入手可能であったものをロシア語で再録した。私はこの版本を知らないけれども、カー氏はもちろんそれを利用しているように、その諸章は多くの新しい細目を含んでいるが、ほとんどは私がそうであるかもしれないと予測したほどのものではない。コロニロフは、私の考えでは、しかるべき資料について見事に把握しており、なすべきことはほとんど残っていない。

著者はこの部分を、私のすでに発表した諸論稿で分析

した本書の後半の方よりもデリケートな雰囲気でも組み立てている。彼はバクーニンの初期の夢と切望のなかにある社会的な諸要素を認識できない。コロニロフの著書には、特に一八三六年のフィヒテ時代を論じているとき、これらについてのおびただしい証拠が含まれている。そのかわりに、カー氏は性的な思索に魅力があると感じている。現存する資料、ひかえ目に教育された若い男女の間でとりかわされた抽象的なテーマ、センチメンタルな自己分析、もしくは他人の感情の解剖についての手紙は、当然のことながら、あの思索に関してはほんのわずかの材料しか提供していない。彼はあどけなくもバクーニンについて述べている。：「そして、彼と性関係のあった女性には知られていない。この問題についての、医学的その他ののはっきりした証拠は残っていない」（三七ページ）。私的な生活と考えることについての証拠、証明書、専門家の意見をためこんでおく習慣は大部分の人にはない、と私は本当に信ずる。しかし、現代の心理学者または性の商人は一世紀前に起ったかもしれない、もしくは起らなかったかもしれない事態を見ているし、私たちが一八三三年にバクーニンが若いことと心から恋に落ちたことを知っていると、二〇世紀の伝記作者は

もっとよく知っていて、こう宣明するのだ(三七ページ)。「けれども彼の不能が青年期からのものであり、それはのちになって彼が情熱をこめて語った威圧的な母への憎しみの心理的所産である、ということはありそうにみえる。性的な吐け口を拒まれた彼の激情は、彼の人生における個人的な、政治的な関係のなかで沸騰し、あの充実した、怪奇な、破壊的なバーソナリティを創造し、それはそれを嫌うところでさえ魅力的となり、一九世紀のなかばのヨーロッパにその刻印を刻みこんだのである」。これは私にはとてもなく無駄話のようにひびく。私たちのなかには自由な人間、社会的な人間を想像することができないものがあり、彼らは専横とわがままにしか目をくれず、代用品、禁止品、わがままでない人間のなかに反逆者、アナキストを見る他の人工の構造物がないかと気をつけている。だから、バクーニンは「正常な性愛の排除の代償を、タディヤナ(姉妹の一人)への嫉妬深い情熱の狂気のうちに」(五七ページ)見出すようにつくりあげられる。長男として彼が少なからざる人々の不愉快なおせっかいから四人の姉妹を守ろうと欲したという事実のために、ときとして彼は人気がなくなり、ゴシップの犠牲者となった。

ドイツとスイスにおけるバクーニンの生活(一八四〇

ているが、私自身はその証拠について知らない。マチルダ・ライヘルが宗教的であったと私は思わない。一六一ページを参照。ベスカンディーニが「イタリア人歌手」(一一七ページ)だとは聞いたこともない。私はむしろ彼は資産家で、ときとして政治家である、と思っていた。私はリゾルジメント、その他の文献のなかで彼の経歴をかなり注意して追求したが、彼を歌手としているものはなかった。だから、この点を正しく検討してほしいものだ。いずれにせよ、カール・フォークトの父親、ベルンの老教授、フォークトは「自由主義教授として名高い自然科学者フォークト」(一七〇ページ)ではなく、プロテスタント神学の教授であるし、フレーベルの新聞紙上におけるバクーニンによる共産主義についての論文(チューリッヒ、一八四三年)は「彼のものと推定されて」一七〇、二三三ページ)いるのではなく、それを筆記させられた若いスイス人の証言によって彼のものとされているのだ、等々。私の伝記の五五一六ページと注二二三を参照)。一八四三年の若い教師は一八九三年にはチューリッヒ大学教授であった。ヴァイトリングはカー氏が主張している(一一七二ページ)ほどにはバクーニンと一致していなかった。バクーニンは、共産主義のヨリ自由主義的で、ヨリ独裁的でない形態をみるときにのみ、

一四四年)についての諸章はコル・ニコロフの第二巻(『ミハイル・バクーニンの放浪時代』、大判の全五八九ページ)、私の伝記に収集されている手紙や事実のなかにドキュメンタリーな基盤をもっている。本書はこうした情報にごくわずかしかつけ加えるものなく、読者はこの四年間の次の二つの大事件を正確に知ることはできない。

つまり、バクーニンがイデオロギー的に進歩したこと、家族が彼を見離したことである。カー氏がその時代の環境にわずかに精通していることを示しているデテールもある。だから、彼はこう指摘するのである。「バルト地方出のドイツ人男爵もいた。彼は：：遠慮して彼の名前を出すのを差し控えた」(九六ページ)。私の伝記の四一ページで、これがユク・ヒュル・フイゲル男爵であることが明らかにされていたのだが(一八八四年の『レヴァル・レビュー』のある号において)。彼はミューラー・ジュトリューピング博士を、ゲルツェンが諷刺しようとしたように(：：「そしてとりわけ非常に奇態な」、一三五ページ)、気楽に紹介しているが、このことはこの高潔な調法な男、よく知られた古典的な学者には不公平である。彼はエンゲルスとバクーニンがベルリンでは一八四一―四二年の冬に会わなかった、と断定している(一四九ページの注一三)。今では彼らは会ったと信じられ

感銘をうけていた。

パリ(一八四六―四七年)についての第一章で、カー氏はドレスデンの国立文書館にあるドキュメントから収集したので、バクーニンが一八四八年の三年前にフリーメイソンになっていたことを私たちは知るのである。非常に不正確なつづりがいくらかある(ベルンシュタイン、コンシデル、マルカン)。プルードンの著書(一八六一年版は全二〇プラス三六〇ページである)が全く不必要に「パンフレット」と呼ばれている(一八二ページ)等々。後年、独裁を賞讃したヴァイトリングのなかにはアナキスト精神の一かけらさえなく、フォイエルバハの思想についてバクーニンが提議した刊行物は、「おそらくマルクスの影響によるものであった」(一八〇ページ)と考えられた、というのは全くありそうもないことである。これらの研究は一八四二年以来の彼の進歩に結びつけられるのであって、間断なく拡大される部分の成果へとおそらく混入したであろうが、その部分は一八七三年までのさまざまなときに彼の闘士によってあらためて阻止されていた。

一八四八年二月一四日のブリュッセル会議(二〇二ページ)はポーランドとロシアの革命的な提携に賛同して開催された。「民主主義連盟」(同上)は「民主主義協

会」と呼ばれた。「理論家」という言葉は、マルクスについてアンネンコフあてのロシア語の手紙における「労働者を理論家に仕立てることによって、労働者をほろぼすこと」（二〇三ページ）というバクーニンの意味づけを、ことごとく網羅しているであろうか。彼が意味した理論家（セオライザー）、理論家（レゾヌール）とは、けっして言葉を摘要せず、ドグマによって論議し誓約するおしやりな人々である。彼がこの印象を得たのは、ブリュッセルのドイツ労働者協会で彼らが議論しているのを聞いたときであった。使用された言葉はきわめて簡潔に典型的なマルクス主義者を表現している。

「バクーニンの日記に書いてあるところでは（ペルリン、一八四八年）、彼ら（彼とマルクス）はおそらく一度以上会い、仲良く話し合っていた」（二二六ページ）と書かれている。私は引用されたロシア語の書物を参照できないでいるが、日記のこの部分はボ・ロン・スキの『資料集』第一巻に再録されている九月の毎日のメモのいくつかと同じ性格であるように思われる。ド・レスデンで原文を見たカー氏だけが、ロシア人たちのために働いた写字生がカリ・エールと読んだ（二三〇ページ注）ところをマルクスと読んでいる。カリ・エールとは学識活動を四〇年代にはじめた後のハイデルベルクの教授を意味する

のかもしれない。もとより、彼が一八四八年九月にペルリンにいたかどうか、私は即座に言うことはできない。カー氏は、「おそらく一度以上」ということがどんな証拠でかを、ドキュメントの原文にもとづいてか、あるいは彼自身の推測にもとづいてか、明白にしている二行を節約したのかもしれないが、そのかわりに読者は、「晩年のバクーニンに多くみられるメロドラマ的なフィクションの世界に」（二二六ページ）属することにして純然たる侮蔑をもってマルクスと彼自身の応答についてのからかい気味の所見に関するバクーニンの説明——一八四八年八月の彼らのユニークな会話に言及している——をカー氏が軽くとりあつかっているときに、彼の侮蔑的な言葉を読まなくてすむことになったのであろう。

ロシアのスパイは九月だけでなく、全くの最初、四月から彼につきまといつており、ミューラー・ジュ・トリュービングは彼の文書を焼き、四月にはもうヘルヴェークの義父の家へ去っていた。カー氏の著書二二六ページによると、彼は九月に「住所録」を焼いた。彼は二度もそうふるまったのであろうが、それともこの記述は当初と後の事実から構成された混乱であろうか。

「一革命家の信条」という第一章はおそらくカー氏の著書のもっともよく均衡のとれた部分である。ド・レス

デン蜂起、サクソンとオーストリアでの裁判や牢獄生活もよく語られており、いくつかの理由で私が検討するところができなかったし、今後でもできないであろうド・レスデンとプラハの文書館の、今だにほんのわずかししか公表されていらないおびただしいドキュメントをかいま見ることができた。一般的に、それらは一方では彼の諸関係が広範に分岐していたことを、他方では取調官に重大な説明をすることを彼が完全に拒否していたことを、明らかにしている。一八五一年の『告白』は、どんな二人でもが完全に意見の一致をみることの期待できないテーマである。それで、カー氏はこのドキュメントを勝手に評価してもよいのである。ロシアの牢獄におけるバクーニンの生活（一八五一—一八五七年）についてのカー氏のかなり貧弱な記述のなかで、私が気づきはじめるのは、一八四九—一八五七年のチェムニッツとトムスクの厳重な拘束の八年間によって、実際にそうであった以上に、いかに健康が破滅的な損傷をこうむったかというのを別にして、知的かつ情緒的に、囚人が小さくなった、それどころか、壊滅させられたと考えるカー氏の性癖である。一八五七年以降の時代、その一九年間のバクーニンの業績に気づき、一八三三年から一八四九年までの彼の抱負と活動を徹底して検討したことがある彼の友人たちは、バクーニ

ンの諸努力の偉大な継続を感じているのであるが、他方で、一八三三—一八四九年期には私的に関心をもたない著者のカー氏は、こうした牢獄時代によって絶望的にバクーニンが小さくされ、かくして一八五七—一八六二年、一八六三年、一八六四—一八七四年、一八七五—一八七六年期に一步步つ倒れていったとしか考えないのである。私がすでに一八六四—一八七六年期について検討したように、カー氏の著書はこの計画にもとづいてできあがっている。

シベリアの章にはバクーニンの更新された活動の乏しい説明がある。私は完全を要求はしないが、著者は、彼が記録していることはそれほど重要なことではなく、彼が語っていないことはいやしむにも足らぬことである、という印象を与えるコツをもっている。ここはさほどでもない。本書においては、初歩的でない読書が絶対に何も聞いていない多数の興味深い事実は正しく語られるべきであろう。F・P・コー師の日記のこの発見は事実よろこばしいできごとである。それのおかげで私たちは、横浜からサンフランシスコまでのせまってくるしい宿所やニューヨーク（一八六一年）でのバクーニンを知ることができる。カー氏はこの資料からの抜粋を二年前に私にくれたし、『スラヴォニック・レビュー』誌（一九三七年一月号）のバクーニンの（シベリア）脱出についての論

文でおそらくこのテーマを論じたであろう。

だが、なぜ「コスモポリタン・レビュー」誌が「正体の分らない短命な急進的な週刊誌」（三三六ページ）と呼ばれたのであろうか。これは一八六一年一月から一八六二年二月まで刊行された月刊誌であって、第一巻は八つ折りの全五六八ページであった。同誌はそのころ刊行が途絶していたかもしれないし、一八六二年の「ザ・ウィーキング・マン」誌がそのかわりであったかもしれない。労働者のあるグループ、ブロンテ・オブライエンの支持者たち、トレッドユニオニスト、その他、および個人主義的アナキストである老A・O・カドンがこれらの刊行を援助した。こうした人々が一八六二年の万国博覧会を訪問したフランスの労働者を欲待したのであって、その八月五日にフリーメイソン・タバーンで国際的な組織、つまり一八六四年の第一インタナショナルの創立が最初に提案されたのであった。だから、それらは当時の最も進歩的な労働者の刊行物——資本家の眼からすればすべての初期の社会主義と同じくもちろん「正体の分らない」——であった。バクーニンは、ウルクハルタイトの機関誌が彼が侮辱したとき、「ザ・ウィーキング・マン」誌（一八六二年四月一日号）に手紙をおくった。カー氏はバクーニンの直接の抗議ではなく、「ザ・ウィーキング・

マン」誌の「『ロンドンにおけるバクーニン』と題する賞讃的な論文」を指摘している（三三八ページ）。

「シャツ事件」（三三九ページ、三四九ページ注）は今まで無視されていた。まだ存命しているとブラハで口づてに聞いてロンドンのアドルフ・シュトラッカーを訪ねたのは幸運事であった（三四一ページ）。J・V・フリックは一八四八年のバクーニンのスラヴ諸原則をリプリントしたジュネーヴの「チェック」誌とおそらく関係していたであろうし、私の見ることでできなかった亡命者の機関誌「ビドニク」誌上で彼の考えについて執筆した。アルメニアの詩人「ナルバンジャン」（三四七、三五五、その他のページ）は私の知るかぎりではナルブランジャンであるが、私の方の誤りであろうか。ウォード・ジャクソン号事件（一八六三年）についての外務省のドキュメントはカー氏によってその著「ロマンの亡命者たち」、一九三三年の附録Eに発表された。彼はブラハのバクーニンについてのオーストリア政府の二つの回想も発見した（一八六三年。三九一ページ、三九三ページの注一九、四〇四ページ、四一〇ページの注一〇）。

カー氏の著書の検討を終えて、私は、バクーニンのイタリヤへの出発（一八六三年秋）で終る第一部は、一八六四—一八七六年の第二部よりもずっとよく理論整然と

し、よく推敲されていることを、率直に承認するが、第一部においてはバクーニンが賛同していた理想がカー氏にあまり嫌われておらず、また刺激的でもなく、軽妙な手ざわでことが処理されているというのに、第二部においては、バクーニンの社会主義的革命的な理念や活動、およびそうした運動一般に対する著者の蔑視が事実を侵食している。バクーニンの友人たちは、彼が生涯ずっと魅力を感じていたどのような運動のなかにも、彼の社会的自由主義的な努力の継続をみている。

本書は全般にわたってバクーニンの夫人に対する不誠実な敵意によって汚されている。有名人の夫人たちは英雄崇拜的な讃仰者と狂信的な弟子たち、あるいは、その真の性格を彼女らが自分たちのあまりにも信頼をよせる夫たちよりもはるかに明敏に読みとったであろう人々の水準にまでは、めったに上昇しないものである。

おろかなものたちのなかにゲーテやハイネがいっしょに生きようと選んだ単純な女性たちを侮辱するものがあるのと全く同様に、ジャンヌ・ダーク、ジョルジュ・サンド、ルイズ・ミシエルのような女性を連添わなかったとしてバクーニンはいつも非難されるであろう。単純な女性たちは最後までゲーテやハイネにとってはきわめて好都合であり、そのことは如才のない観察者にもきわめて

て好都合であったであろう。たとえ陰悪な舌がゴシップを広めるとしても、それを拾いあげるのは必要なことなのであろうか。「オーセツト館（ゲルツェンの家庭）のゴシップで、彼（ゲルツェンの息子）はバクーニンの欠点をきちんとみてとっていた」とはカー氏の立派な言葉（四〇一ページ）であるが——それはカー氏自身の立場を述べている。ロシア語についての知識のおかげで、彼はこれやこれと同じようなゴシップが入手でき、私は見たことはないが、ゲルツェン—ヘルヴェーク—オガリョーフや同じような諸事件を記述しているように思われる「ロマンの亡命者たち」（一九三三年）を上梓する。ついで、彼はマルクスにでくわし（私は同書を知らない）、今やバクーニンに出くわしたが、それらはいつも敵対的または落胆させられた観察者や非常に敵しい敵の笑いぐさとなっている。忍耐強い探求によって無数の誤解が暴露される。マルクスとエンゲルスのこのうえない奮闘（一八七二、一八七三年）、（一九）二〇年代初頭の「告白」をベースとしたキャンペーン、その他、そしてとてもない資料が研究者の前におかれた。一人の敵、ステクロフ（一九二〇—二七年）はこの資料にもう一度誤った解釈を下そうとした。「またソヴェトの正統性という法則が、バクーニンとマルクスの間のすべての問題に関

してマルクスの味方をすることを著者によぎなくさせている」とはカー氏自身の言葉である（六七ページ）。それから、他のものたちはこの資料を、リカルド・パッケリの『長い橋の悪魔』、ロンドン、一九二九年においてのように利用した。私が『ザ・タイウズ・リテラリー・サブルメント』誌で純粋として想像の産物であると彼に挑戦したというに、この書物は著者によって「歴史小説」と記され、賞讃されている。

別の書物、白ロシアの女性、エレネ・イスヴォルスキーによる『バクーニンの生涯』（パリ、一九三〇年）は、刊行者が後に削除しようとしたステクロフから取られたスキャンダラスな情報を含んでいた。私はバクーニンを弁護するのではないが、カー氏が手紙や訪問によって私と連絡していたとき、私は彼にこれについて語り、バクーニンの私的な生活を尊重するように彼に紳士として訴えた。この点で本書はそれがなされたかどうか、明らかにせねばならない。

そのような状況で、本書についての私の意見はただこうでしかない。本書は、少なくとも大要においては、オリジナルな材料や研究が描く像ではなく、著者のイマジネーションのバクーニンなる人物を提示している。ある場所で払われた注意が他の場所でのとるに足らない

注意や遺憾な省略を清算することはできない。初步的な読者や研究者にとり、この書物は、もしも多くの叙述を確認し、あるいは、どこに重大な省略があるかを発見する手段をもたないならば、実のところ一つのワナである。本書は学術的な研究書というよりも口先達者は小説にほかに近い。著者のみは、あるものが少なくとも芸術の仕事を連想する寛容と広量な人間的な心づくしに欠けている。彼は本質的に残忍で心が狭く、いわば三度もバクーニンのひつぎの釘を全部打ちつけるのだ。寛容の全面的な欠如と多くのあからさまな残忍行為は本書の偶然的な読者でさえも感じるにちがいない特性である——そして、だからバクーニンは、『長い橋の悪魔』によってのみ彼を知った読者にとっぴきぜんとしてそうであったように、この伝記の読者にとっては彼の真の本質はいぜんとしてほとんど理解されないままである——それらがバクーニンの生涯についてのたった二冊の英語の書物なのである。

マックス・ネットラウ

一九三七年二月二日

（おわり）

（坂入純二訳）

運動センター定例会

毎月第一・第三日曜日午後一時から

（東京都大田区西蒲田7の61の4

エンリコビル3F

アナキズム運動センター）

共学読書会

毎月第二・第四日曜日午後一時から

（同右記の場所）

初心者のための会

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

1974年9月15日発行 Vol. V, No 10

編集兼発行者 三 浦 精 一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

（振替東京133830番 三浦精一）